

## 「アンドロマック」(ラシース)

トロイ戦争でギリシャの英雄アケレウスがトロイの英雄ヘクトールを斃し、トロイが滅亡して後の話である。アケレウスの子でトロイ滅亡に大功のあつたエポール王ピリュスは、ヘクトールの妻アンドロマックと遺児アスチアナクスを虜にして王宮で面倒を見てゐた。彼はスパルタの王女エルミオーヌと婚約してゐたのだが、アンドロマックに心を奪はれ、浮立つ思ひでエポールを訪れたエルミオーヌに強い屈辱を味ははせてゐた。處が、アンドロマックは亡夫への貞操を守らうとしてピリュスの云ふなりにならうとしない。ピリュスは怒り、戀情と憎惡とに心が引裂かれる。

そんな折、ギリシャ軍總司令官アガメムノーンの子オレストがエポールに現れる。ギリシャは仇敵トロイの復活を恐れ、ヘクトールの血統を斷つべく遺児の引渡しを強く要求してをり、オレストはそれを告げにやつて來たのだが、實は彼には別の目的があつた。彼はエルミオーヌ

を戀してゐたが、つれない態度しか示されず、屈辱の餘り死なうとさへ思つてゐた。處が、今やピリュスがエルミオーヌやギリシヤ國民を怒らせてもアンドロマックに夢中になつてゐるのを幸ひ、エルミオーヌを拉し去らうと企んだのだ。

だが、やがてピリュスは己れが「戀の炎の奴隸となつて、その戯れに弄ばれ」てゐると悟るに至り、アンドロマック母子をギリシヤに引渡してエルミオーヌと結婚すると宣言する。オレストは絶望のどん底に陥り、エルミオーヌは喜びで有頂天になる。

けれども、その事を知るとアンドロマックは翻心して、ピリュスと結婚すると云ふ。遺兒を彼に託した上で、結婚直後に自殺して、亡夫への貞節を守らうとしたのだ。それと知らぬピリュスは喜び、結婚式の支度を命じる。

エルミオーヌは逆上し、オレストにピリュスを殺せと命じる。オレストは婚禮の席でピリュスを殺す。然るにエルミオーヌはオレストを激しく詰り、ピリュスの屍の上で我身を刺し貫く。オレストは狂亂の裡に意識を失ふ。

フランスの大悲劇作家ラシーヌの出世作である。アンドロマック以外の主要人物は皆「戀の炎の奴隸となつて、その戯れに弄ばれ」て破滅する。中でもエルミオーヌの曝け出す愛憎の感

情は凄まじい。ピリュスを殺して復讐してやる、「思つてもぞくぞくする」と語る彼女は、オレストに殺害を命じて後かう獨り言つ、「自分で自分が分からない、この狂ほしい思ひは？」「ああ！ 愛してゐるのか、憎んでゐるのか、それさへ知る事が出来ないのか？」そしてその揚句、ピリュスを殺したオレストを罵つて云ふ、「戀に狂つた女」の言葉を眞に受けるなんて、この私の「心の底の底」をどうして讀めなかつたのか。

モリエールの「人間嫌ひ」の主人公アルセストは「戀は理性ではどうにもならない」と眩くが、戀に限らず、「理性ではどうにもならない」諸々の感情が人間誰しもの「心の底の底」には確實に潜んでゐる。「自分で自分が分からない」とのエルミオーヌの「狂ほしい思ひ」は人間ならではのものなのだ。「アンドロマック」の十年後、ラシーヌは代表作「フェードル」を書く。女主人公のフェードルは情欲と良心との悲痛な葛藤に苦しんだ末、情欲を制し得ぬ己れに絶望して毒を呷る。「フェードル」執筆後、ラシーヌは若き日の信仰に回歸して演劇界から隠退し、讚美歌と宗教劇を書いて生涯を終へた。畢竟、人間を超える存在の助け無くして「どうにもならない」のが人間である。然るに吾國には防衛論議を始め、さういふ突詰めた人間觀の強靱な傳統の不在ゆゑの無意味な空騒ぎが如何に多いか。（フェードル／アンドロマック」渡邊守章譯岩波文庫）